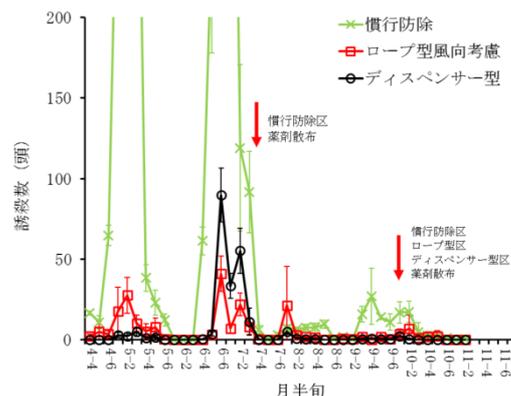


## 小規模茶園における交信攪乱剤(性フェロモン剤)を用いた チャノコカクモンハマキの防除

近年、わが国の緑茶輸出は大幅に伸びていますが、輸出の相手国ごとに残留農薬基準が異なり、使用可能な農薬が限定されているため、使用する農薬については注意が払われています。その一方で、地域によってはチャノコカクモンハマキの多発が続いており、その防除が輸出茶栽培の弊害となっています。そこで、滋賀県農業技術振興センター茶業指導所では、チャノコカクモンハマキを対象とした化学合成農薬の防除を削減するため、有機栽培にも利用できる交信攪乱剤による防除法について技術確立を行いましたので、その概要を紹介します。

### ☆ 技術の概要

1. 交信攪乱剤を越冬世代成虫発生前（2017年3月31日）に、ロープ型では10a当たり50m、ディスペンサー型では10a当たり250本設置すると、いずれも4月から7月までの120日間程度慣行防除に比べ有意にフェロモントラップの誘殺数が少なく、交信攪乱効果が認められます。また、ロープ型とディスペンサー型には、同等の効果が認められます（写真、図1）。
2. ロープ型交信攪乱剤は、平年の最多風向を考慮してほ場の風上に重点的に設置すると、ほ場へ均一に設置した場合に比べ交信攪乱効果は高くなります。
3. 交信攪乱剤の設置にあたっては、ロープ型の方が作業時間は短く設置も容易ですが、設置後の摘採や整枝作業等では移動が必要なこともあります。
4. 越冬世代幼虫の密度が高い場合は、交信攪乱効果が認められても、性フェロモンによる誘因交尾ではない偶発的な接触による交尾が行われたり、周辺茶園で交尾した雌成虫の飛び込みの頻度が高くなるため、被害が大きくなることがあります。



### ☆ 活用面での留意点

1. 交信攪乱剤の設置にあたっては、周辺ほ場を含めて設置前年の第4世代幼虫（越冬世代幼虫）の密度を抑えておく必要があります。
2. 本剤は空気よりも重いため、急傾斜地茶園では高所で効果が低くなります。
3. 詳しいことは、滋賀県農業技術振興センター茶業指導所（TEL:0748-62-0276）までお問い合わせください。

（日本政策金融公庫農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 吉岡 宏）